

〔翻刻〕白百合蔵 奈良絵本『七草』、『さざれ石』、『いさよひ』

佐藤 信一 内藤 まりこ
 塩越 陽子 森田 理沙
 柴田 佳世子 吉村 澄香
 島田 紘子

前稿^{註1}に引き続き、本学所蔵の奈良絵本の中から「七草」、「さざれ石」、「いさよひ」を翻刻の形で紹介する。

まず「七草」であるが、その諸本は、大別すると流布本と広本に分けられる。流布本は刊本の御伽草子二十三篇の一つと、蓬左文庫蔵写本の「くさ物語」上巻とが知られる。広本は穂久邇文庫本などが知られている。その中で本学所蔵の「七草」は、流布本に近いと思われるが、本学所蔵本のみに見られる独自異文が多く見られる。

書誌

写本。所蔵は白百合女子大学付属図書館。所蔵者整理書名は「奈良絵本 七草」。整理番号913.49N48。外題は「七草 全」。内題はなし。書写年時を示す注記はなし。残存は全。保存状況は不良。折り目の下の部分が破れている。一帙。蔵書印、序跋、著者を示す記事はなし。奈良絵本。表紙は紺地金に

楓、水の文様。装幀は袋綴じ。見返しは原本にあったもの、巻数は一巻。料紙は鳥の子紙。数量は全一冊。表紙の寸法は、縦一五、五センチメートル、横二二、七センチメートル。全一〇丁。遊紙は前後ともになし。一面の行数は一一行。絵は濃彩、丹緑、色刷のものが五面ある。書入はなし。本文は平仮名、漢字。刊記、奥書、識語、極札、箱書などはなし。

凡例

字配りは原本の通りに従った。
 助動詞の「む」、「なむ」等は、原本で「ん」の字母である「无」が充てられていても、「む」で翻刻した。
 明らかかな仮名遣いの誤りのある場合は、訂正した文字をカッコで示した。
 底本の汚損等により判読不能な場合は、他本によって掲出し、その旨を注記した。

【翻刻】

むかしよりいまにいたるまで

まいねん正月七日に野辺に

出て七草をつみてみかとへ

くこにそなふるといふなり

そのゆらいをくはしくたつぬ

るにそこくのかたはらにたい

しうといふものありおやに

かうあるものなりすてに

はや百とせにおよふちゝはゝ

ありこしなともかゝみ目なども

かすみ物いふこゑもきこえぬ」(一オ)

ほとのあるさまなりたいしう

くちはてさせ

たまへる

御

すかたを

見まいらせる

たひことに

なげき

かなしむ

事

かきり

なし」

〈絵〉

たいしうおもふやうは二人の

おやの御すかたを二たひわ

かくなさまほしくおもひて

あけくれてんとうへいのり

申けるはわかおやの御すかた

を二たひわかくなしてた

ひたまへと仏神三ほうに

うつたへこれかなはぬもの

ならはわかすかたにてんし

かへてたひたまへわか身は

おひとなりてくちはつる」(二ウ)

とも二人のを(お)やをわか

なし給へとてあたりに

ちかきとら(こ)うせんにうち

のほりて三七日かあひたつま

さきをつまたてかんたんを

くたきのりけるさる程に

しよてんしよふつこれをあ

はれみたまひて三七日に

まんするくれかたにたい

しやくてんてんわうはあま

くたり給ひたいしうにむ」(三オ)

かひてのたまふやうはなんち

あさからすおやをあわ(は)れみ

ひとゑにてんたうにうつたふ

る事かみはほんでんたい
しやくしもはけんらう地神
まてなふしうをたれ給ふ
によりてわれこれまでき
たりたるなりいてくなんちか
おやをわかくなさむとて薬を
あたへ給ふそ
ありかたき」

(三ウ)
(四オ)

〈絵〉

しかるにしゆみのみなみに
はくかてうといふとりあり
かの鳥なかいきをする事
八千ねんなりこの鳥春の
はしめことに七いろの草を
あつめてふくするゆへに
よりてなかいきをする也
そのはくかてうの命をは
なんちかおやのいのちにてむ
しかへてたふへし七色
の草をとりあつめて柳の木」
をはんにしてそれにのせて
玉つはきのゑたにて正月
六日のとりの時よりはし
めて此草をうつへし鳥の
時にはせりといふ草をうつ

(四ウ)

へしいぬのこくにはなすな
といふ草をうつへしいの刻
にはこきやうといふ草の
ねの時にはたひらこと
いふ草うしのときには
ほとけのさといふ草とらの」
時にはすゝなといふ草うの
ときにはすゝしろといふ
くさをうちてたつの時
には七いろの草をあわ(は)せ
てひかしのかたよりいはるの
水をむすひあけてわか
水と名つけ此水にてはく
かてうのわたらぬさきに
ふくするならば一とき
に十年つゝよわ(は)ひをへかへ
りて七ときに七十年の」
としをたちまちに
わかくなして
そのゝちは
八千年までの
しゆみやうを
さつくるなりと
おしへ
給ふそ

(五ウ)

ありかたき

事

なり」

(六オ)

〈絵〉

(六ウ)

たいしうおほきによるこひて

とうこうせんよりたちかへりける

おりしもころはあらたまの

一日よりも此草をとりあつ

めてちゝはゝにこそあたへけれ

さて正月七日には二人のおや

のすかたを見たてまつれば

はたちはかりにへかへりける

さるほとにたいしうよろこふ

事なにゝたとへむかたもなし

(七オ)

「されは今にいたるまで七」

くさをみかたとにそのふる事

此ときよりそはしまれり

わか水といふも此いわれなり

すてに此事てんかにかくれ

なかりければみかとゑいらん

ましゝて世にたくひなき

事なりとてたいしうをうん

しやうへめされちやうか(あ)

んしやうの

みかとの御くらゐを
たいしうにゆつり

た

まふ」

〈絵〉

(七ウ)
(八オ)

これと申もおやにかうある

ゆへなりときく人しゆせう

にありかたくおもひてみな

かんする心をもよほしけり

正月にすしもなきものを

くらゐになし給ふをある

ためしといふ事有これも

このときよりそはしまれり

ちやうせいてんのうちには

しゆんしうをとゝめりふらう

もんのまへには日月おそし」

(八ウ)

と申も此ときよりそ

申つたへし

かならずゝ

人を

あわ(は)れめは

その

むくひ(い)

はやくして

我身の
ためになると

かや」

(九オ)

〈絵〉

(九ウ)

いよ／＼一もんはんしやうし

すへ(糸) 久しく

も

さかへ給ふ

めて

たき

ためし

なり

け

り

(一〇オ)

次に「さざれ石」を見て行く。「さざれ石」自体は不老長寿を祝う祝儀物の一種。広く読まれたものであろう。本学所蔵の「さざれ石」は、奈良絵本。字が乱れており、汚損も甚だしく極めて読みにくい。ほとんどが独自異文で、その上他本よりも長い。その意味で紹介するに値する伝本であろうと思われる。

書誌

写本。所蔵は白百合女子大学付属図書館。所蔵者整理書名は「奈良絵本 さざれ石」。整理番号913.49Sa99。外題は「さざれ石」。内題はなし。書写年時を示す注記はなし。残存は全。保存状況は不良。一帙。蔵書印、序跋、著者を示す記事はなし。奈良絵本。表紙は紺地金に松の文様。装幀は袋綴じ。見返しは原本にあったもの、巻数は一卷。料紙は鳥の子紙。数

量は全一冊。表紙の寸法は、縦一六、六センチメートル、横二三、四センチメートル。全一〇丁。遊紙は前後ともになし。一面の行数は一三行。絵は濃彩、丹緑、色刷のものが五面ある。書入はなし。本文は平仮名、漢字。刊記、奥書、識語、極札、箱書などはなし。

【翻刻】

しんむてんわうより十二代のみかとをはいむてんわうと申たてまつりけるしかるに此御代はかきりなくめてたき京にて君はけむ

わうにてことにゆたかにまし／＼ければ民もさかへをそなし侍りけるさるほにこのみかとおとこみこひめみや三十八人のわうしわたらせ給ふ卅八人めはひめみやにてをはしましけるかすもしらさるほとこのわうしたちの御すゑなれはとてその御なをさゝれいしの宮とそなつけ

(一オ)

まいらせ給ふ
されは

御かたち

世に

すくれ

めてたく

ましく

けれ

は

あまたの

御中に

こえて

御てう(ちよう)あひ(い)

なのみ

ならず

いつき

かしつき

給ひ

ける

〈絵〉

さるほとに御せいしんまし

くける御とし十四にて

せつしやうとのゝきたの

まんところにうつしまいらせ

給ふめてたき御おほえ

一てん四かひのうちにな

(一ウ)

(二オ)
(二ウ)
(三オ)

こす人こそなかりけれ

しかるにさゝれいしのみや

つくくおほしめし給ふやうは

にんけんのしやうしむし

やうのことはりはくわ

きうのつものうへになに事

をはあらそひせき火のひ

かりのうち此身をよする

よいにはらう月をもてあそふ

といへともあかつきはへつ

りのくもにかくるゝ三かひの

とくそんしやくそんすう

しやうしのおきてにもれたま

はすいつるいき入いきを

またぬ世の中にいたつらに

こしやうをもねかはすして

いのちをはりなるときたゝ

すこくとひとりめいとに

おもむかむにすせんになの

けんそくとも一人もつ

きしたかふへからすあはう

らせつにかしやくせられむ

ときこうくわひ(い)するとも

かなふましたゝ一すちに
こしやうをねかははやおほしめし

(三ウ)

(四オ)

けるそありかたきそれ

しやうとは十方にありと

きけともわきてめてたき

しやうとはたうはうしやう

るりせかいなりとおほし

めしとり給ひてつねに

おこたらずしてなむやく

しるりくわうによらひ(い)と

(四ウ)

となへ給ふあるゆふくれの事

なるに月のいつるかたをうち

なかめ給ひわかむまれん

しやうとはそなたそとおほし

めし御こゝろほそくてすこ

くくとたゝすみ給ふところに

こくうよりとひきたるもの

を御らんすれはこかねのてん

くわんをひたいにあてたる

くわんにん一人まいりてさゝれ

いしの宮にるりのつほをさゝ

け申けるはわれはたうほうの

やくしによらいの御つかひ

こんひら大しやうなりとそ

申ける此つほにらうやく

ありこれをきこしめされとて
御としもより給はすわつらはし

(五オ)

き御こゝちもなくいつまでも

かはらぬ御すかたにて御いのち

のおほりもなくこゝろうれ

しき御事はかりにてさかへ(え)

させたまはんとてかき

けすやう

に

うせに

けり

(絵)

さてはさゝれいしのみや此

つほをうけとり給ひあらあり

かたやとし月ねかひたて

まつるしるしかなとて三と

いたゝきらうやくをなめ

給ふにあまきあちはひ

いふはかりなしさてあを

きつほにしろきもんし

ありよみて御らんすれは

うたなり

きみかよは千世に

やちよに

さゝれいしの

いはをとなりて
こけのむすまて

(六ウ)

(五ウ)

(六オ)

とありこれすなはちやくし
によらいの御ゑいかなり此うた
によりてさゝれいしのみやを
ひきかへていはほの宮とそ申け
るさてそのゝちとし月をくり
給ふほとにいさゝか物のかな
しき事もなくときはの御す
かたにてゑいくわにほこり
給ふ御いのちのなかくわたら
せ給ふ事すへて百さいな
りせいむてんわうちうあい天
わうしんこうてんわうおうしん
てんわうにんとくてんわう
りちうてんわうはんせいてん
わういんけう天わうあんかう
天わうゆうりやくてんわう
せいねいてんわうこれ十一代
のあひたいつれもかはらぬ
御すかたにてさかへ(え)させ給ふ
ありつる秋の事なるにふつ
せんにむかひともしひをかゝけ
てやくしのしんこんをねん
しをはしけるところにかたし
けなくもやくしによらいたつ
とき御すかたにていはほの
(七ウ)

宮にむかひての給ふやうなん
ちいつまてかはくのせかひ(い)に
こゝろをとゝむらん十せん
くらゐとてもにんげんのだ
のしみはわつかなることなり
いそぎ
わかしやうとへ
まい(ゐ)るへしと
おほせ
けるこそ
あり
かたけれ
〈絵〉
それしやうるりせかいのありさ
まをあらゝかたりてきか
すへしちきやうはすなはち
るりなり八しゆのしやう
こん七ちうのほうしゆれき
くゝたりなんちをうつさん
しやうとは七ほうのれんけ
のうへに玉のほうてんを
たてゝしろかねのかはらを
みかきこかねのとひらをならへ
たまのすたれをかけやう
らく玉のはたをつらねぎん
(八才)
(八ウ)

ぎんれうらにて身をかさり
たるす千人のによくわん
こはくにしゆらをくわへ百み
のをんしきをそ給ふること
ひまもなしなに事も心の
まゝのこくらくなればさのみ
はいかて八くのせかいにある
そとの給ひて此しやうを
かへすして
（九才）

しやうるりせかいに
おもむき
給ふそ
ありかたき
（九ウ）

〈繪〉
上代にもまつたいにもためし
すくなき事ともかなもろ
くゝのほとけのひくわんはたの
み申せたのまれたまはんとの
御ちかひなりかほとにこそ
おはせすとも神ほとけを
しんし
（十才）

たまはん人
なとかその
しるしの
なかるへし
（十ウ）

最後に「いさよひ」を見ておこう。「いさよひ」は、「国書総目録」によれば、国会図書館所蔵本、京都大学蔵本、高安六郎氏蔵本、守屋孝蔵氏蔵本が知られるのみである。また国会図書館蔵本は京大本の写しであるとされている。本学の「いさよひ」は数少ない写本であり、紹介する価値は十分にあるといえよう。

内容に関して言えば、「せんきといひしから人の二十五けん夜月にたんせよとさくしたるし」（一ウ六く九行目）と、唐の詩人銭起の「歸雁」の「二十五弦彈夜月」（引用は『全唐詩』に拠る。卷二三九参照。）を引いていることが注目される。銭起は中唐の呉興の人。天寶十年（七五一）の進士。詩集に「錢考功集」があるが、『日本国見在書目録』にも記載がない。これは日本の漢詩文の受容が白詩に限られたものではないことを物語るものだろう。

書誌

写本。所蔵は白百合女子大学付属図書館。所蔵者整理書名は「奈良絵本 いさよひ」。整理番号9113. 41168。外題は「いさよひ」。内題はなし。書写年時を示す注記はなし。残存は全。保存状況は並。一帙。蔵書印、序跋、著者を示す記事はなし。奈良絵本。表紙は紺地金に水草の文様。装幀は袋綴じ。見返しは原本にあったもの、鶴亀松をあしらった亀甲文様、紙質は異なる、光沢のある銀色の紙。巻数は一卷。料紙は鳥の子紙。数量は全一冊。表紙の寸法は、縦一六、五センチメートル、横二三、七センチメートル。全二〇丁。遊紙は前後ともになし。

一面の行数は二三行。絵は濃彩、丹緑、色刷のものが五面ある。書入はなし。本文は平仮名、漢字。刊記、奥書、識語、極札、箱書などはなし。

【翻刻】

あきふかくなりゆくまゝに
あさちにすたくむしの
こゑもなきよはりてことに
ものさひしきにいさよふ
月のやうくさしあかりて
かりの一つらなきわたるも
ことちをたてたるやうなれ
はもよほされてさうのこと
をりつにしらへて御つまを
とけたかくかきあはせ
まふに大なこんのきみ
ひくことのしらへにお

(一オ)

ちよ月もよし
こよひくもちを

わたる

かりかね

くときはかりをかことにて
候へと申させたまへはやさしく
もおもひよりたまへるかなせん
きといひしから人の二十

五けん夜月にたんせよと
さくしたるしのおもかけ思ひ
いてられておもしろくこそ
とて御返し哥

(二ウ)

ゆくかりも

月に

しらへの

ねにや

おち

まし」

(二ウ)

〈絵〉

かくて月もかたふきふけゆく
よはのものしつかなるに
をのくおもふ事のみちく
あらんかしかりたまへわれ
はかせになりなんとのおたま
ふにいとわかき人のわれはた
うちの大きみにかほるの大
しやうのさしも心をつくし
しはくまうて給ひしに
つるになひかせたまはさりし
御ころとまた大しやうの
とし月をかさねてもおもひ
わすれたまはて中のきみを」

(三オ)

かたしろとみたてまいらせたまひし御ころのすゑのたのもしくもあはれにもおほゆるといへはそはなる人それもほいなき事そかしむくらのやとに袖をかたしきてもとこそ侍れさやうにかたみにおもひおもはれたるはかりにてはなにをすくせのたよりとかせんわかきほとこそかくても侍れしらぬは人のゆくゑと思ひければおひてのたよりは久しく」なれなつさひてこそといへはまたつきなる人まことにそこへの給ふやうならんこそねかひなれさもとて御こたちもたてもさうくしからんおのこふたり計に女ふたりはかりふかきまとの中にやしなひたて、うちまいりせさせよとあらんに女のさうそくと、のへていたしたて、中くうなといはんこそうれしからめ

(三ウ)

おのこはとりくくに人ゝに」
なりてこくはんはくなくと
いひてことに中くうの
人のかし御はら

から

とて

つき

たまはんこそ

めやすからん

と

あれは」

(四ウ)

(五オ)

〈絵〉

またつきなる人あなめたの御ねかひともやわれはかすならぬ身なれはおもひてもかひ侍らしきころもの大しやうの下くさと思ひながらあさからすちきらせ給しあすかひのひめきみのことくおもはれてはかなくなりぬといつはりきかせてその人の心さしのふかさあさゝをも心え侍りてのちかいらうをちきらはやとおもふなりといふをみなうち」

(五ウ)

わらひてあなおそろしと
しうじんふかき御たくみや
此つきは中なこんのきみ申
たまへとすゝむれはいと
はつかしけにてうんしゐ
たりいとゝとくとせめ給へは
われはたゝちきりはしめ
む事をおもへは身もわなゝ
きはつかしからむかしたゝい
つまても此所にさふらひ
て春は花のえん秋はも
みちのかきくのえんなど
おりくにつけたる御あそ
ひにましらひてかやうの
御ものかたりきゝ侍るこそ
おもひをのふるなかたち
にて侍れとていとほつかし
けなるけしきなりまたか
たはらなる人わかねかひには
たのむ人のまたことかたに
かよふをきゝてしのひく
にたはふれみてみあ
らはさむときみゝはさみし
てねやの中にはしり入
てなん女のかみかなくりひけ

(六才)

むしりてうちたゝきなど
したらんこそ心ちよからぬ
何かその花もみちとひわな
とのやさしたちたの事
はかりおもしろからむといふを
さうしみきゝたまひて人
人の心よせなるものかたり
おもしろく侍るなりいつれも
けんせのあたる事ともなり
つゐのすみかとしてむゐのみや
こありしりたまはずやまつ
みゝちかくきゝしりたまはむ事
よりかたるへしいろはとて
いとけなきよりよみつた
ふるそよし此心もいろはに
ほへとも侍るは春のはな日々
ににほひふかくいろうつく
しく侍れともつゐにち
りてもとのねにかへるを
しよきやうむしやうとゝかれ
たりまたわかよたれそつ
ねならむとあるはみな人
此世にありはてすこれを
せしやうめつほうといふなり
うるのおくやまけふこえて

(六ウ)

(七才)

とはなす事ある山となり
人けんのたいなりなす」

(七ウ)

事なきとは三世ふかとかと
とてわか心をわきまへ侍れ
はきゝあひらくもなし
されはしやうめつゝと
りあさきゆめみしゑひも
せず侍るもたゝあさきゆ
めをみるをゑひくはとせん
よりはむるのみやことて
たのしみをきはむるところ
なりこれをしやうとのほう
もんにはさいはうこくらく
となつけむるの人には
十まんおくのみちとをき」
ちゑあるにはわか身のほか
一ふんもとをからすして
みやこあるとゝけりこれ
をあんしんとてししやう
しんゝしんゑかうほつ
くはんしんとて三しんと
これをいへりとのたまへ
は御まへの人ゝやまと
哥のことはりいとたけ
のしらへなとのやうの事

こそ御心にもしめ給ふへ
きにかゝるたうときほと
けのみちまてまなひ」

(八ウ)

しらせ給ふ事よとてみな
なみたをなかしはなうち
かみていまやさはいまよ
りはたゝひたすらにほとけ
のみちをねかはむとかたら
ふそつのつほね申されけ
るは女の身にはなんきやう
くきやうもなりかたく侍れ
はいかゝし侍るへきとあれは
さやうなる人のためには
りつけとて五つのいましめ
より五百のかすまて身に
ふるまふへき事かたく」
いましめ侍るなりこれを
たもちたまはゝくにかるし
わさもなくいとをしかる
へき人もなししかれば
なす事なき身になり
て

(九オ)

つるに

たのしみを

きはむる

めうにいたる

とき

きかせ給ふ」

〈絵〉

御かたはらなる人のわれはか

いをたもたむ事もかたかる

へしあんしんもかなひか

たく侍れは此身なからにて

心得る事やまいらむと申

せはいてやさやうの人のた

めにいひをける事侍り

三のをしへの中にもしゆの

みちとてせい人はこくうを

こしやうにしてその中に

あそふへしとなりちゝはゝ

よりえたるすかたをその

まゝにそこなひやふら」

すしてしんきれいちしん

をつねに心にすてす身に

たもてとなりしんとはみつ

からをわすれてたにんを

めくみすくひまつしきを

たすけものことになさけ

をさきとしあはれむ心

あるをいふきとはよろしき

(九ウ)

(十オ)

はしたかふなりとみにして

もおこらすたからをつみては

人によくほとこすてんに

せをつゝめ地にぬきあし

をしあまねく人に」

ましはりてあらそはず

我身をへりくたるをいふれ

いとはしんはきみをたつとみ

子はおやにかうありおとゝは

あにゝしたかひおひたるを

うやまふをいふちとはひ

ろくもろくのふみをまな

ひまんのうにたつしふる

きをたつねあたらしきを

しり大かた三とあんして

せひをあきらむるをいふ

しんとは心すなをにして

ことはをたゝしくみちに」

あらされはくみせずよろつに

まことあるをいふこれをけ

むせにもちひ侍れは心

すなをにしてつるにほと

けのたひとみをあちはひ

侍るなりされはきやうには

なをかへて五かいとなせる

(十一オ)

(十ウ)

(十一ウ)

なりとのたまへはこよなふ
うれしき事におもひ入

たるけしきなりまたそは
なる人うらやましくも心へ
わけさせ給へるかなけんせ
のことはさも侍るなりの「
ちのよの事こそこともよく

(十二オ)

にふれたく侍れと申せ

はそれもかたきにあら
すほとけの十九しゆつげ

より三十しやうたうして
ときたまへるみのりには

めうの字を色にたとへ
ほうの字を心にたとへ

れんげを色こゝろのふ
二とき給へりれんげは

花とみとおなしやうに
おひいつる物なれはみを

心にたとへ花を色にた「
とへたるなりされはしよほん

(十二ウ)

の時ほとけ三まいを入た
まひて一ことをものへ

たまはぬところを上らんは
さとりしなり又かせうの

一しの花をうけさせ給

しをいませんしうとこ
むりうし侍るとかたりた

まへはこれもつるのかり所
のたつきなる人むらさき
ふをにほんきのつほねと
かやよの人申せしかつ
るにそのみちにてとくた「

(十三オ)

うありけると申侍る女のみ
にあひたる事にてや侍らん
と申せはまことにそにほん
きこそみにちかき事な

れかみとは人にありては
心なりたとへはめに色を

みてはめこれをしらすみゝに
きゝてはみゝこれをきかす

はなにかをかきてははな
これをきかすくちにあち

はひてはくちこれをしらす
心みなこれをしる此心をさ

してかみといふたましゐ
とよめりたましゐあきらか

(十三ウ)

なるとかきてしんめいとあ
かむされはしんめいほかに

なしわかこゝろのすなを(ほ
なるをいふなり我心みたり

なれはさいなんおこりちこ
くまたありたゝ我心の

かみをよくまつるにすぎ

たるはなしこれをなひ

しやうくといふほかしやうく

といふはきとあひよくあひ

あくよくのしうちやくする

心をいむといへりかる」

かゆへにいむといふしはをの

れかこゝろとかけりされは

しんたうにはたましゐを

しるをさとるといひしらさ

るをまよひといふこゝを

ないてんには三かいゆい

一しんしんけむへつほう

ととけりいにしへの人も

しろきいとほそむるにした

かひてその色をあらため

くもるかゝみはみかくにより

てそのひかりをますまか

れる木はたむるによりて」

なをるなりにふきかねほと

くにしたかひてときこ

とをうるなりものみなゑ

むによるといへりみつから

(十四才)

(十四ウ)

かをろかなるをしへとおも

ひたまふとも此ことはりを

あさゆふのまくらことにさ

せ給へをのつから思ひうる

事も侍らんかし此よ

のさかへはみつにゑをかきこ

ほりをちりはむることく

何のゑきかあらんとかへす

くくのりのしのやうに」

のたまへはちうなこんのき

みもけにふるとうおたも「おたも」三文字判読不能

おもはし

とおもふも

ものを

おもふなり

おもはしとたに

とおもはしやさは

とあるもこゝろをすてよ

とのことにごそといま

ことおもひゑて侍れと」

あれはひけむしり候むと

いひし人おほくの事を

きゝ侍れといつれもみゝ

にとゝまり侍らす五か

いとほはまくり五つの事

(十五才)

(十五ウ)

にてや侍らむまたしんめ
いとほはりはらのくすりに
やいづも此御所へしん
めいこんとてもちてま
いり侍るそかし御ように
たつ物ならはくやしやとり
てをかましものをとそゝ
めくみな人めあはせし」
つゝことのはもなしさう
しみなもわらひたまへは
申事のちかい侍るとて
くちにまかせて

(十六オ)

ひろふてふ

ふところかいの

かひあらは

つるに

みのりに

あはんとそ思ふ」

〈絵〉

と申せは心とき人やわか
らふをみてよこしまの心
をひきかへてよきみちに
おもむくなるまへにいふ
まかれるきはたむるに
よりてすなをなりとは

(十六ウ)

(十七オ)

かやうの事そやとほめ
させたまへはしたりかほに
てついたちゐたりかほる
大しやうちの大きみをう
らやみし事のはかなさ
よあひよくをすつるをけ
しやうくゝと侍れはおそろ
しやちこくのたねそかしと
かたらへはそはなる人その
御かたのねかひにそへて
御子まうけてさかへ
んと申せし事いかは
かりのつみそやまして
中将のきみのそうし
にゝて人の心をためさん
と申させたまひししう
しんのほともいかゝし
たまふへきいさやともに
ほとけのみちに入てし
つかなるところにすまひ」
せむとすへきことのはを
かたはらておしへさせおは
しませかしとなげくを
きこしめしてあなかち
にいほりのしつかなる

(十七ウ)

(十八オ)

ところにあれこにもあ

らすゆくもとゝまるもた

ちてもゐても心にすてさ

るをさせむと申となり

たるま大しのさいてんち

くよりきたりたまふ心を

とひ侍れはにはの木のを

たをさしてしたかへけるを」

(十八ウ)

しゆしき人と侍れは思ひ

おもひにかきつけて

あさゆふのみやつかへの

ひまことにあんし

けるか

つるに

さとり

侍るとぞ

きこえ

ける」

(十九オ)

なお、この「七章」、「さざれ石」、「いさよひ」は、白百合女子大学図書館ホームページ上で、今回作成した翻刻、及びそれをもとに作成した釈文とともに公開されている。貴重書画像のURLは http://schib1.shirayuri.ac.jp/rare_books/rare_books.html である。図書館のトップページに「貴重書画像」というリンクボタンがあり、そこからアクセスすることも出来る。

る。大方の叱正を請いたい。

この翻刻を作成するにあたって、平成十四年度白百合女子大学研究奨励費の助成をうけたことを言い添えておく。

注1 「翻刻」〔白百合女子大学蔵〕うらしま「白百合女子

大学研究紀要」三十八号（平成十四年十二月刊）、「翻

刻」〔白百合女子大学蔵〕小おとこ「言語・文学研究

論集」三号（平成十五年三月刊行予定）。

〔本学助教授（佐藤）／本学大学院学生（塩越）／本学学生（柴田）／本学大学院学生（島田）／東京大学大学院学生（内藤）／本学大学院学生（森田）／本学大学院学生（吉村）〕